ぎのわんの歴史・文化遺産を歩く 其の10

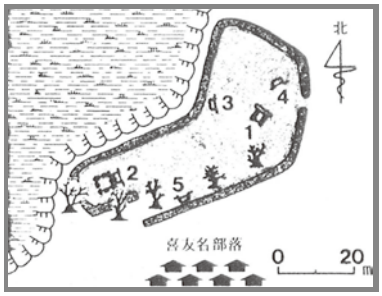
「キャンプ瑞慶覧③」

はじめに

今月も地域の方々より聞取り調査で教えて頂いた、キャンプ瑞慶覧の戦前の様子を中心に歴史・文化遺産を紹介します。

喜友名グスク

喜友名バス停付近に位置する市内では数少ないグスクの一つです。北側から西側にかけて自然の斜面を利用し、西南側に正門、東側には裏門があり、周囲は野面積みの石積み、その内側には五または六カ所の拝所があったとされています。現在でも喜友名集落の聖地として崇拝されていますが、一九一四年の郡道工事や戦後の基地接収等により南側一帯は破壊されてしまいました。グスクに関する資料は極めて限られていますが、北谷グスクとの争いに関する伝承や、周辺ではグスク時代（約八〇〇～五〇〇年前）の土器や中国製の焼物、建物跡が確認されています。



喜友名グスク想定図

フトゥキアブ

喜友名グスクから東側約一〇〇mに位置する洞穴で、入口がフェンスで囲まれていることから、県道の歩道からも確認することができます。洞穴の入口は二m程ですが、内部は瓢箪状で幅約一六mの広場があり、天井は高いところで約五m、総延長は約八五mとなります。喜友名グスクにつぐ聖地として崇拝されています。

フトゥキアブ入口外観

新城下殿遺跡

新城出身の民俗学者である佐喜眞興英が明治～大正時代の新城集落の民俗・風習等を取りまとめた沖縄で最初の単一村落の民俗誌である『シマの話』には「新城の発祥は現在の場所から西北方約五〇〇mの字新城小字下原の丘陵にあった七戸から」と書かれています。現在でも屋敷囲いの石垣や石畳道が残っており、南側に残るシンバルガーの湧泉と併せてかつての集落の面影を今に伝えています。

新城下殿遺跡遠景

問合せ：文化課 ☎893-4430

茶ぐゎーゆんたく 115

市制と共に歩む作品たち

秋と言いますと様々な事柄を思い浮かべますが、「芸術の秋」もその一つです。例えば、自分の身近な芸術に触れてみることを、楽しんでみてはいかがでしょうか。そこで今回は、宜野湾市にゆかりのある画家、與那覇朝大氏（一九三三～二〇〇八年）の作品を紹介します。

まず、宜野湾市民会館の大ホールの緞帳には、羽衣をまとった天女を中心に、宜野湾市の花木であるサンダンカと戦前に有名だった宜野湾並松が描かれています。これは、一九八二（昭和57）年の市制施行20周年にあわせてデザインされた作品です。翌年に行われた落成式には、こけら落としの儀が行われ、市民の皆様に披露されました。

宜野湾市民会館の緞帳

次に、宜野湾市役所の正面入口から入ってロビーの右上に、緑豊かな大地に雲間から光がさしている風景を描いた「光彩」と名付けられた絵画があります。この作品は、一九八七（昭和62）年市制施行25周年を記念して贈呈を受けたもので、與那覇氏は、同年の7月1日（市民の日）に、文化功労者として表彰されました。

この2作品の他に、市民図書館の利用者カードに描かれている笛を吹くキジムナーのイラストや、市民図書館の正面玄関から二階へ上がる階段の壁の「民族の祭典」という壁画は、與那覇氏の作品です。宜野湾市と共に歩んできたそれらの作品は、時代を超えて、今も変わらぬ光を放っています。

「光彩」（宜野湾市役所一階ロビー）

『宜野湾市史』への問合せ
文化課 市史編集係（市立博物館内）
☎870-9317